

小児科

(スタッフ)

- 部長 : 原 卓也 (4月から)
 : 大野 拓郎 (3月まで)
 副部長 : 岡成 和夫 (4月から)
 副部長 : 塩穴 真一 (地域医療部副部長兼任)
 主任医師 : 川口 直樹
 嘱託医 : 岩松 浩子
 : 小山 紀子 (4月から)
 : 市地 さくら (10月から)
 : 春日井 悠 (8月から)
 : 川上 勲 (4月から9月まで)
 : 香月 比加留 (3月まで)
 : 坂田 優 (3月まで)
 専攻医 : 山下 もも (4月から7月まで、12月から)
 : 矢野 文子 (4月から11月まで)
 : 明 祐也 (4月から11月まで)
 : 坂倉 光 (4月から7月まで、12月から)
 : 平原 慎之介 (4月から9月まで)
 : 大賀 慎也 (8月から)
 : 木下 湧暉 (10月から)
 : 石倉 稔也 (3月まで)
 : 中島 佑 (3月まで)
 : 後藤 未央 (3月まで)

長年にわたり小児科を支えてこられた大野拓郎先生が異動され、4月より原が部長として赴任しています。また大分大学より岡成を副部長として迎え、新体制での診療となっています。

(診療実績)

2022年の入院患者数は743例と、昨年と比較して若干の減少を認める程度でしたが、COVID-19流行前と比較すると減少した状態が続いています(図1)。疾患内訳を見ますと、COVID-19が著増しており、社会的な流行状況を反映していました。肺炎・気管支炎はRSVが流行した昨年と比し減少しました。川崎病も昨年から6例減少でした。頭部外傷や尿路感染症などのCOVID-19流行状況に影響を受けないと思われる疾患に関しては、前年同等でした(図2)。

年齢分布は1歳未満 20.1%、1歳 13.0%、2～5歳 22.6%で、変わらず5歳以下が6割弱と多くを占めています。16才以上の年齢の入院の増加については、COVID-19でのつきそい入院の増加が影響していました(図3)。

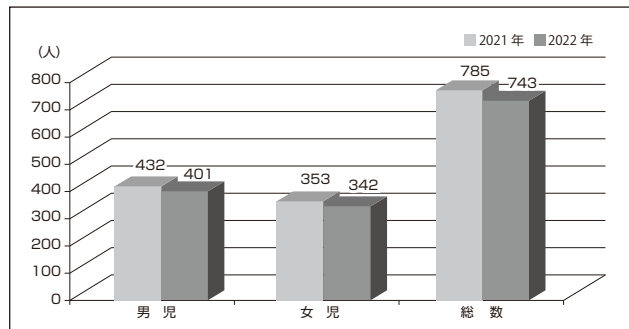


図1 入院患者数

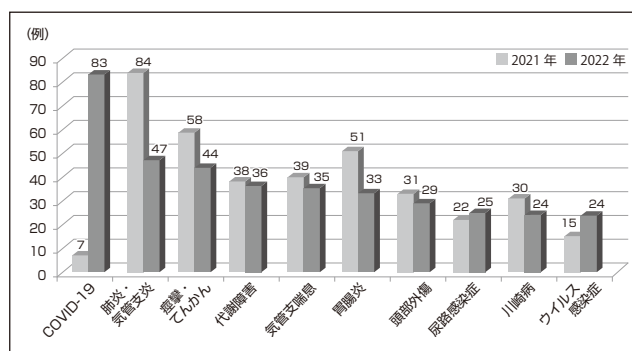


図2 入院患者頻度別上位10疾患

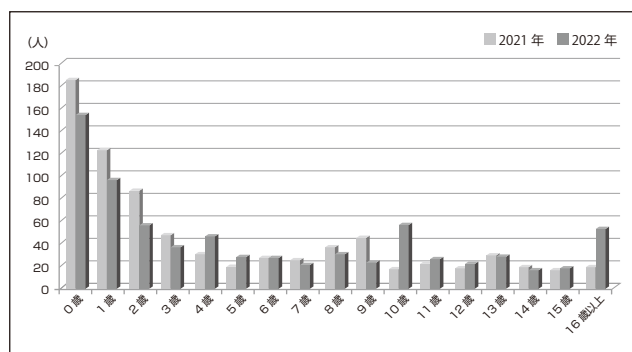


図3 年齢別入院患者数

虐待対応件数については23例で、うち15例が児童相談所からの診察依頼(措置後症例)、8例が新規の虐待/虐待疑い症例でした。

稼働指数は平均病床利用率73.6%(前年75.9%)、平均在院日数8.7日(前年8.3日)で、低水準で推移しました。また、紹介率:平均111.2%(前年115.1%)、逆紹介率:平均154.4%(前年182.5%)と高いレベルで病診連携を維持することができました。院外の先生方の多大なご支援・ご協力に心より感謝申し上げます。

外科系[形成外科、整形外科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、眼科、皮膚科(症例数順)]症例の小児科病棟入院管理患者数は121例(前年123例)でした(図4)。関係各科先生方のご協力に心から感謝致します。

死亡患者数は縊死後の低酸素性脳症、肺出血、来院時心肺停止の3例でした（表）。

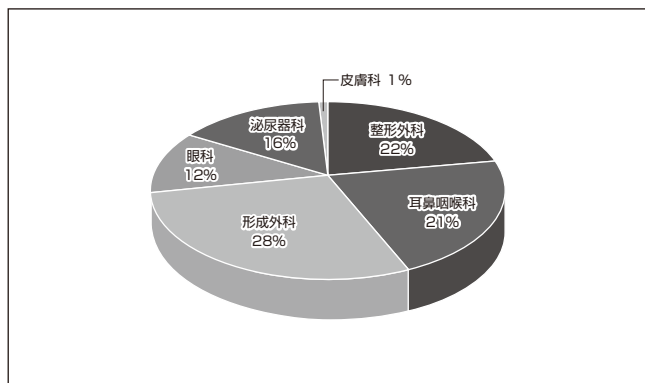


図4 外科系小児科管理入院患者割合

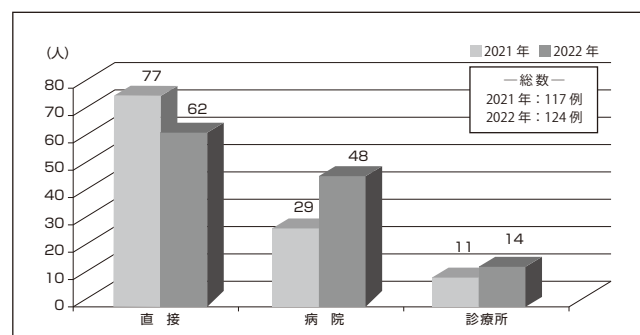


図5 救急車搬送紹介元別入院患者数

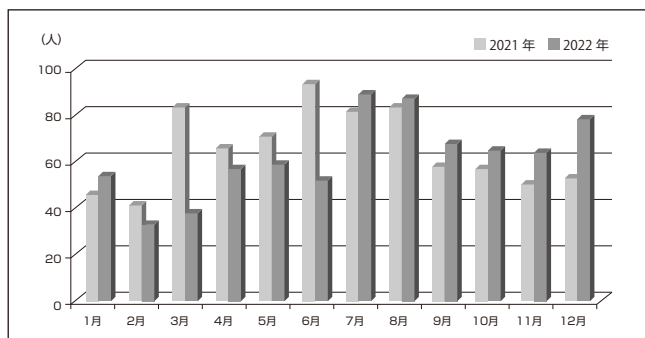


図6 月別退院患者数

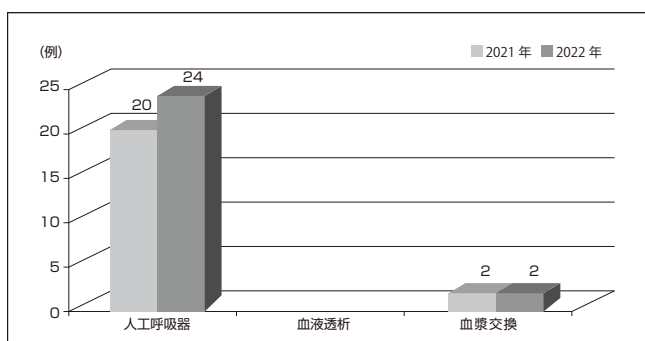


図7 集中治療

表 小児科死亡症例

1	女児	14歳	剖検無し	低酸素性脳症
2	男児	9歳	剖検無し	肺出血
3	男児	1歳	他院剖検	来院時心肺停止

他施設に転院搬送を必要とした症例は、大分県内で実施できない心疾患手術症例や急性心筋炎（福岡市立こども病院、JCHO九州病院、九州大学病院）、免疫疾患・悪性疾患（九州大学病院、大分大学医学部附属病院）、てんかん外科手術症例（長崎医療センター）でした。

（今後の方向性）

【診療基本方針】

これまで通り基幹病院として当院に求められている安定した二次・三次医療の提供と、高い専門性の追求や幅広い領域における診療確立を目指し、また救命救急センター・周産期センターとの連携を強化しながら地域完結型医療提供を目標として、診療内容の一層の充実に努めてまいります。COVID-19に対する社会体制の変化に伴い、再び医療状況が変化することが懸念されますが、様々な変化に対応出来るよう尽力し、虐待や精神疾患などの社会的問題に対しても積極的に取り組んで参ります。疾患のみではなく子どもたちとその家族の想いを大切に、子どもの視点に立った医療を提供できるよう、努力致します。

【在宅・長期療養所移行支援】

退院後に在宅医療のケアを要する症例に対する支援についても新生児科と共同で継続し、スムーズな在宅・長期療養型施設への療養移行の実現を目指します。また在宅医療を行われている家庭へも支援が行き渡るよう努力致します。

【移行期医療】

成人期に移行する小児慢性疾患の患者に対し、シームレスな医療提供が実現できるよう成人期医療へのトランジションシステムの構築に精力的に取り組んでいきたいと考えます。ご協力ご理解の程何卒よろしくお願い申し上げます。

【教育活動】

大分大学医学部臨床実習や大分県立看護科学大学NPコース実習への協力、小児科専門研修のための専攻医受け入れ、小児循環器や小児神経などの専門医育成などによる学生・若手医師教育を通じて今後も責務を果たしていきます。

【学術活動】

コロナ禍のため現地開催での学会参加はまだ少ないですが、オンラインを中心に活動することができました。論文については3編の発表でしたが、今後も更なる研鑽に励んで参ります。

「全人的、かつ、Global standard な医療提供」を目標に、子どもたちの笑顔の絶えない社会実現のために少しでも貢献できるようにスタッフ一同全力で取り組んで参ります。

(文責：原卓也)